



Introduction of CHIKUSE

ちくせ
千久世

地理：14.78km²

人口：約2000人

天候：熱帯気候。年間雨量が非常に多い。

見所：破空山(はくうさん)／黒砂漠と白砂漠

ホテル・ロイヤル・シーサイド

フロム・ザ・シー・トゥー・ザ・ワールド

※スキューバエリア・水中ポスト・託児サービスあり

野良交尾と生殖免許

国から生殖免許を取得した者にのみ、
性交が許可されている。
リビドー防止法により野良交尾は禁止されている。

山のもん、海のもん

山側に暮らす人々と海側に暮らす人々と、
2つの集落があり、長年軋轢があったとされている。

レアゲノム

化石から取り出されたゲノムの中でも特に希少なものを。
4年前に千久世島の破空山(はくうさん)で
偶然発見され、国際的に話題となった。

スコア

政府により記録を行う個人の成績表。
全国民に義務化されている。スコアの獲得率によって、
レアゲノムを得られる量が増えたり、
良好な居住区に住むことが可能になったりする。
ゲノムパッチ社が監視・計算している。

ゲノムガチャ

発掘されたゲノムにはランクがつけられている。
このランクをつける行為をゲノムガチャと呼び、
SSR(スーパースペシャルレア)、SR(スペシャルレア)、
UR(ウルトラレア)などのランクがある。
千久世産はSSRの最高品質基準が与えられている。

デザイナーベビー

厚労省で徹底管理されている精子と卵子を
受精卵にするにあたって、国民はゲノムを操作し、
人工子宮でより優良な人類の生産を目指している。

ゲノム操作

体内の遺伝子を作り変え、
望み通りの身体へと変化が可能となるゲノム編集や、
生まれつきの疾患や精神異常を改善する
ゲノム治療が行われている。

HAS'

ハビネス・アンチエイジング・スローライフの略、
人類が求める最適な生活。

ゲノムパッチ社

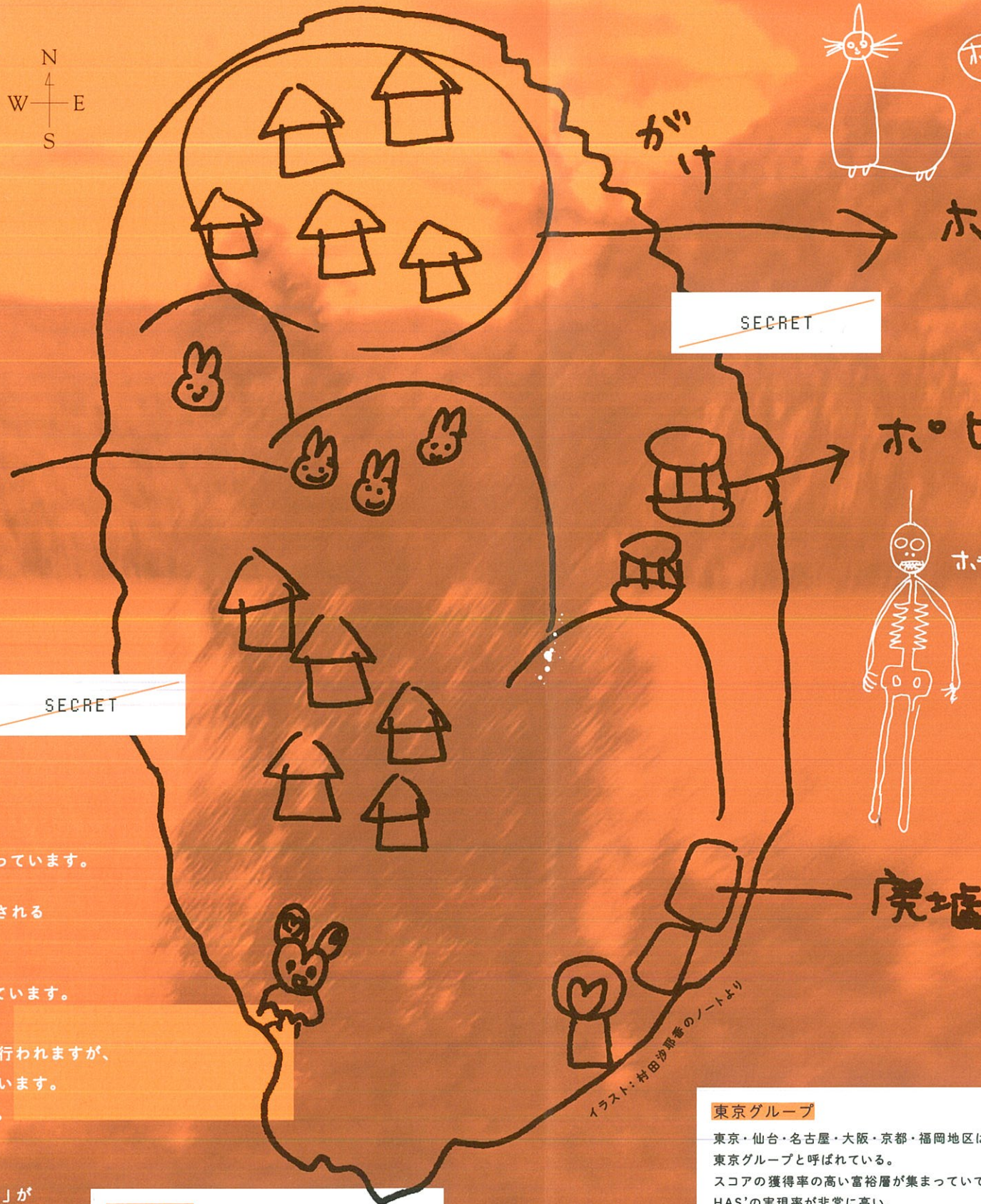
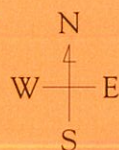
全国のレアゲノムは、東京を本社とする
製薬会社研究所「ゲノムパッチ社」によって
発掘・供給を管理されている。

東京グループ

東京・仙台・名古屋・大阪・京都・福岡地区は
東京グループと呼ばれている。
スコアの獲得率の高い富裕層が集まっていて、
HAS'の実現率が非常に高い。
千久世産のレアゲノムは主として
東京グループに供給されている。

技能実習生

レアゲノムは海外からの技能実習生が発掘している。
環境は劣悪だと噂されている。



ポーポー様
ブーブー
ホービター

ホービターの人とくうさん
ホービターの人とくうさん
ホービターの人とくうさん

ホービターの人とくうさん
ホービターの人とくうさん
ホービターの人とくうさん



ホービターの人とくうさん

廃墟



ホービター

千久世は長らく外界から遮断されていたために
独特の生態系を守って来ており、
「東洋のガラパゴス」とも称される自然が美しい島です。

デジタル・デトックスができる自然保護の島であると同時に、
ゲノム編集に必要な世界的に希少なレアゲノムが
発掘されたことでも知られており、遺伝子工学の最先端を担っています。

国生みの伝説が古来よりあり、「ポビ原人」が使用していたとされる
『世界最古の浣腸』が発掘されたこともあります。

今でも「ポーポー様」を讃える『ポーポー祭』は毎年開催されています。
ポーポー祭の最終日は生贄の身体をたいまつで叩き、
ポーポー様の御前で心身を鍛え上げるといふ秘祭『モドリ』が行われますが、
参加は千久世島民限定で外部の人は見ることさえ禁止されています。
『モドリ』の語源は、死んで生まれる前の世界に戻ることです。

島の名産は「もずく」です。
もずくから光を放って生まれたやさしい妖精の「もずくちゃん」が
千久世をご案内します。

SECRET



本当は、変態ではない人間はこの世にいないのでは

村田 沙耶香 Sayaka Murata

松井さんと初めてお会いしたのは、もう何年も前のことになります。「村田さんは松井さんと出会ったほうがいい」と山本さんが仰ってくださり、みんなで演劇を観に行ったのが最初でした。

それから、雑誌「サンプル」の「変態」という特集で対談をさせていただきました。そのとき、不思議なくらいすると、いろんなお話ができました。いつもだったら「変だ」と言われてしまうようなエピソードも、「わかる、わかる」と頷いて、「そういえば僕もね、」ととっても奇妙なお話をしてくださるので、なんだかとても安心しながら、どんどん開放的な気持ちになったのを覚えています。松井さんと話していると、なぜか今日の前にいるのが、異性であり人間であるという感じがあまりなくて、松井さんというやわらかい生きものと向き合っている気持ちになるのです。

なんで安心するのでしょうか、どこが似ているのでしょうか、と皆でご飯を食べてるときになんとなく口にしたとき、「二人とも、自意識がない変態だから」と山本さんが仰っていたのを覚えています。

「変態」というワードで繋がった私と松井さんですが、私は心の中では、本当は、変態ではない人間はこの世にいないのでは、とずっと思っていて、自分が特殊だとはまったく思っていないのです。だからもしなんらかの「変態性」が自分や自分の作品に備わっていたとしても、それは異物にたいしてわかりやすいラベルを貼って安心する人が多いというだけで、ラベルを貼っている人も本当は変態なのだと思っていました。「ノーマル」も変態の一種だと思っていて、それにくらべれば自分はとてもありがちな変態で、むしろ無個性な感じがしていました。なので、「すごくわかります」と大きく頷きました。松井さんも、「なんかわかるー」と仰っていましたが、理由を聞きそびれたので、松井さんがどういうお気持ちで同意なさっていたのかはよくわからないままです。

「同じ設定で松井さんは戯曲、私は小説を書いて、二つの物語をつくる」ということに、いつの間になったのか、どうしてこんなことになったのか、正直、よくわからずにいます。たぶん、だれにもわからないんじゃないかと思います。

私の記憶が正しければ、本当に一番の始まりは、雑談で、村田さんの小説をいつか松井さんが舞台にできれば楽しそうだね、と笑いながら話していたような気がします。それが、いつの間にか、なぜか設定だけを共有して、二人ともそれぞれ別の、新しい作品を書くことになりました。神津島に旅をして、「架空の島をつくらう」ということになりました。

私はいつも、どこかを舞台にして小説を書くときは、まず書き始めてしまっ、それから取材に行きます。けれど、このプロジェクトでは、まず旅に行きました。

城崎で合宿もしました。合宿の最後には青柳いづみさんをお呼びして朗読の試演会があるというのに、私のノートは真っ白でした。たぶん松井さんのノートも真っ白でした。それでも、初日に設定のすり合わせをしているときも、そこから、松井さんはずっと冷静で、静かに坦々と作業をしていて、私はそれを見てとても焦りました。松井さんって、変わった生きものだけれど、すごく真面目な人なんだ、と思って、松井さんに追い付かなくてはと、必死に小説を書きました。あまり書いたことがない枚数を一気に書いて、臍鞘炎になりました。

自分の書いた文章が、青柳さんの素晴らしい朗読で、音になって、空間になっていくのを見て、とても興奮しました。演出をしている松井さんは、やわらかいのに少しきりっとしていて、演出のときにはこんな感じの松井さんになるんだ、と思ってみていました。

私はだんだん不思議な気持ちになってきました。演劇の世界では普通のことだと思うのですが、“敬語の関係”でプライベートもそんなに知らない人たちと、こんなに一緒に寝泊まりをするのは初めてのことだったからです。

旅や寝泊まりを繰り返して、inseparableの皆さんが、私にとって、「家族ではないけれど、家族的な時間を過ごした人たち」になりました。

いよいよ舞台の公演日が近づき、それに合わせた本の発売日へ向けた締め切りも近づき、私も松井さんも必死に原稿を書きました。私はほかの出版社さんにカンヅメまでさせていただきました。書きながら、ふと思ったのが、松井さんが、松井さんでよかったなあ、ということでした。同じ設定で小説と戯曲を書くというとき、もしも松井さんが、すごく神経質で、「村田さん、ちゃんと設定を守ってくださいよ!」とびりびりする人だったり、「僕のほうが面白いのを書くぞ!」とやたらとはりきったりする人だったら、たぶん脱走していたと思います。私は松井さんと一緒に作った島の設定をはちやめちやにして作品を書いてしまいました。叱られるのではないか、とときどきしながら送ったのですが、松井さんは、なんだかすごく笑ってくれるのです。「ははははは、いや村田さん、はははははははは、なにこれ、ははははは」

神戸でトークをする前、私の送った途中の小説をパソコンで読んで笑っている松井さんを見て、たぶん、松井さんは本当に、松井さんという生きもので、ニンゲンという生きものの生態から少し離れているのだなあ、と思いました。そのことにやっぱりとても、安心したのでした。小説は、松井さんの影響を受けて、なかたとても自由になった気がします。「村田さん、こんなの書いたことあったっけ?」と山本さんに言われ、「松井さんのせいでこうなりました」と言いました。

松井さんの戯曲は世界観が大きくて、人間たちの行動も奇妙だけれど生々しくて、それがどんどんはじけて思いもよらないところまで連れていかれて、文字だけでもとてもインパクトがありました。この言葉が俳優さんの口から出てきて、空間になっていくんだと思うとぞくぞくしました。

それは私の見たこともない、それなのにとても懐かしい千久世島の物語でした。私が物語を書いたのと同じ千久世島に、松井さんの想像力が重なりとこんなふうな物語になるんだ、ととても不思議な気持ちになりました。

この原稿が終わったら、舞台の稽古をこっそり見に行きたいと思っています。どんなふうに世界が出来上がっていくのか、想像もできない世界です。舞台を見ると、私は本物の千久世島の空気が吸えるのだと思います。自分の小説の、たぶん少し未来にあるかもしれない、千久世島の物語。そこへ行くことができることを、とても幸福で、奇妙な奇跡だと思っています。

1979年、千葉県生まれ。これまでに群像新人文賞優秀作、野間文芸新人賞、三島由紀夫賞などを受賞。2016年には「コンビニ人間」で芥川賞を受賞した。

“ふるまい方”から、新しいふるまい方を見つける

松井 周 Shu Matsui

三年前に村田沙耶香さんとの出会いによって、この企画は始まりました。初めて小説を読んだ時も、お会いして話をした時も、勝手ながら「ああ、ドッベルゲンガーとはこんなふうに出会うんだなあ」というぐらい似てると思いました。だから雑誌「サンプル」という自分の劇団で出している雑誌で対談させてもらったのです。

松井 だから祭りはね演劇の起源でもあるし、好きですね。インチキ祭を皆で考えようっていうワークショップをうちの舞台美術の人がやったりするんですけど。

村田 へー。楽しそうですね。

松井 楽しいですね。なんでもいいから草とかとってきて、ただまあるく円を作るとか、あるいはここに入っちゃいけない場所ねとか、奥の方に見えなくなった場所で作るだけで、でもその前でなんかある作法をするとか決めるだけで、祭っぽくなる。

(中略)

村田 一緒に考えてみませんか、すごい変な儀式とか(笑)。

松井 ねー一緒に儀式を考えるみたいな小さい作品を作るとかね。

あ、それおもしろいですね。ふふふ。

村田 おもしろい嘘、一緒に考えられたらちょっと楽しいですね。(雑誌「サンプル」【対談】村田沙耶香×松井 周「予感をとらえる」p.32)

ここで話している、「儀式を考えるみたいな小さい作品」が今回の『変半身』という「架空の島」を設定した大きな作品に進化したということになるでしょうか。

村田さんと話したり、一緒に作品を手掛けるようになってお互いの違いははっきりしてきたと思いますが、きっと村田さんと僕に共通するものは「人間っていったいなんだろう?」という疑問です。二人とも祭や儀式でのふるまい方や日常の行動も、根本的になぜそのようにふるまうのかがよくわからないのだと思います。

例えば、打ち合わせの最中に村田さんに、「じゃあ、15分休憩してまたここで集合しましょう」と声をかけると、村田さんはその場に立ち尽くしてたりします。普通は、スマホを確認したり、ちょっと外の景色を眺めたりと「休憩のふるまい」を演じると思うのですが、村田さんは微動だにせず、そこにいるのです。聞こえなかったのかなと思って再び声をかけると「はい。15分前行動だと思っているから次の行動に備えます」と言うのです。

すごく小さなことですが、こんなふうに人間のふるまい方を必死に学習しようとしているのが村田さんで、それは僕よりもずっと多くそうなのです。

僕は、自分のサンプルというユニットでは“人間のニセモノ”を描きたいとよく語っています。人間って人間のフリをしてるだけで、実は何もわかってない生き物なんじゃないか、という疑いです。自我や自由意志があるようなフリをして、実は何も考えていない。“誰かがやっていた習慣を真似しているだけ”という実感をもとに、作品をつくらうと考えていました。そういった部分がとても似ていると思います。

村田さんが今回書いた小説版『変半身』も、人間のニセモノ感に迫るものです。「Ⅰ」~「Ⅲ」のパートがあって、「Ⅰ」は2018年の初頭に書かれたものであり、「Ⅱ」と「Ⅲ」は今年の夏から秋にかけて書かれたものです。「Ⅰ」だけを読んだ時の印象が「Ⅱ」で180度ひっくり返るような展開で、「Ⅲ」に至っては、個人的な感覚で言うと、字が小人になって行進していく様を体験しました。自分の足元が崩れていくような恐怖と快感が笑いになって襲ってきます。村田さんは「松井ワールドに取り込まれないように書いていました」と言うのですが、こちらも村田さんの妄想力に

負けるものかと、脳のリミッターを外して自動筆記のように書いていたら、ハッと気付くと村田さんが前に話していた内容をそのまま書いている、ということもありました。

では、舞台版の『変半身』はどうなっているか。村田さんの小説版より、わりと人間寄りなのかな? もちろん、人間が行うことなんてどこかニセモノであることは前提ですが、それでも演劇の特性上、生身の人間がその重さを持ったまま生きている感じを、舞台版『変半身』では追求しています。

世界はデタラメにつくられたにもかかわらず、人間はそこに生まれて、誰かの行動を真似して、誰かの価値観に染まり、その生に意味を持たせようとする……その様(さま)に愛嬌を感じます。一方で最近、こうも思います。「でも、もしそんなデタラメな人間のふるまいで不遇な扱いを受けたり、殺されたら、たまったもんじゃねえな」という恐怖です。あらゆる歴史の愚行がそんなふうに行われてきたのだとしたら、ちょっとやっぱり、その“デタラメへの抵抗ガイド”を、生身の人間を使ってつukれないものかとも考えてしまいます。

そう考えるようになったのは、今回のプロジェクトの一環で、台湾の緑島に取材に行ったことが大きいかもしれません。戦後の台湾国民政府による戒厳令が敷かれた「白色テロ」(1947~1987年)の時代。緑島には、国民党に逆らう恐れのある者を更生させるという名目で収容した監獄があります。根拠のない容疑で政治犯として捕まった者たちが多数収容され、拷問を受け、死んでいった場所です。高い塀に囲まれて「徹底的反共」「滅共復国」などのスローガンが大書されていました。

台湾では40年間、国民政府に従順に振る舞うことを強いられたわけです。40年間の空白の時代、国民政府のデタラメに付き合わされたわけで、この傷は深いと思いました。現在の台湾の民主化の根本には、そのことへの反省が根強くあります。日本の統治下であった歴史も含めて、現実が非現実的にひっくり返っていくことの不条理さがあり、そのことと生身の人間の重みを『変半身』では対比したいと思いました。

それもあって、今回は台湾のプロデューサーでもある Shakespeia's Wild Sisters Groupの新田幸生さんを通じて、台湾人の王宏元さんに出演をお願いしています。直接、台湾の歴史を取り入れるということではありませんが、私たちと違う歴史を経ている国の方と作品づくりをしてみたいと思いました。

俳優たちは、僕が仕掛けたデタラメな状況につまづき、転げ回りながら、ふるまい方を見つけようとしてくれています。村田さんや僕だけでなく、実は誰も未来のふるまい方はわからないし、流されながらも抵抗したり、ツツコミを入れることは可能だと思います。その無様な姿から新しいふるまいが生まれることを信じてつくりました。

1972年、東京都生まれ。青年団に俳優として入団後、作家・演出家としても活動を開始し、劇団サンプルを立ち上げる。2011年「自慢の息子」で岸田國士戯曲賞を受賞。

inseparable 変半身(かわりみ)

東京芸術劇場 シアターイースト: 11月29日(金)~12月11日(水)

三重県文化会館 小ホール: 12月14日(土)・15日(日)

ロームシアター京都 ノースホール: 12月18日(水)・19日(木)

神戸文化ホール 中ホール 舞台上: 12月21日(土)・22日(日)

原案: 村田沙耶香 松井 周

作・演出: 松井 周

出演: 金子岳憲 三村和敬 大鶴美仁音 日高啓介 能島瑞穂 王宏元 / 安蘭けい

舞台監督: 谷澤拓巳

美術: 杉山 至

音楽: 宇波 拓

音響: 牛川紀政

照明: 吉本有輝子(真昼)

衣裳: 堂本教子

演出助手: 池田 亮(ゆうめい)

演出部: 渡邊亜沙子

美術製作: 濱崎賢二/六尺堂

美術背景: 拓人

照明操作: 岩田麻里

衣裳製作: 前田和美/土田ひとみ

台湾取材コーディネーター: 新田幸生

協力: 青柳いづみ/深澤しほ/一般社団法人サンプル/ダックス/ブ/アミューズ/唐組/FUKAIPRODUCE 羽衣/レトル/青年団/éeru/ホリプロ/至福団/シバイエンジン/城崎国際アートセンター/水天宮ビッド

東京公演主催: 三重県文化会館[(公財)三重県文化振興事業団]

東京公演共催: (公財)東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 / ローソンチケット

三重公演主催: 三重県文化会館[(公財)三重県文化振興事業団]

三重公演後援: レディオキューブFM三重

京都公演主催: ロームシアター京都[(公財)京都市音楽芸術文化振興財団]・京都市

神戸公演主催: 神戸文化ホール[(公財)神戸市民文化振興財団]

共同製作: 三重県文化会館[(公財)三重県文化振興事業団]

ロームシアター京都[(公財)京都市音楽芸術文化振興財団]

神戸文化ホール[(公財)神戸市民文化振興財団]

助成: 一般財団法人地域創造

文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会 ●スグサ

国家文化芸術基金

宣伝美術・パンフレットデザイン: 佐野研二郎/香取有美(MR DESIGN)

宣伝イラスト: 鳥飼 茜

WEBデザイン: 斎藤 拓

票券: 村松里美(ローソンチケット)/加藤裕子(quinada)

制作: 藤木やよい(quinada)/新開麻子

企画・編集: 山本 充

プロデューサー: 三好佐智子(quinada)

企画・製作: 有限会社 quinada

パンフレット編集: 濱

パンフレット撮影: 大橋 仁

前田 立(村田沙耶香写真)

印刷: 宮崎龍太(関西美術印刷)

2019年11月29日発行

金子岳憲 Takenori Kaneko （高城秀明）

最初に誘われた時は詳しい内容は聞けてなくて、ただ松井さんの作品ということしかわからなかったんです。ただ松井さんとはこれまで何度も一緒にやっていますし、またやりたいと思っていたので、ぜひ出演したいと思いました。松井さんの作品にはパターンが2つあると思っていて、1つは登場人物が自分で勝手に作ったルールのもとに社会を構築しているような想像力が強いパターン。もう1つは今回のように、テクノロジーや歴史などを踏まえた、現実性を帯びたパターン。両方とも面白いと思うんですけど、僕が出演させてもらうものはなぜか後者のほうが多いですね。現実と地続きの世界観なので演じやすいし、登場人物がみんな、自分の立場や意見を正しいと思って行動しているのでそれぞれ個性が強い。演じながらそこまで強く思えるキャラクターってあまりないので、役者冥利に尽きるという感じです。

『変半身(かわりみ)』については、正直、あまりまだわかってないところがあるんですけど(笑)、島を舞台に暗喩的なことがいろいろ盛り込まれているなと思います。僕が演じる高城秀明は、時代が変わっていく中で取り残されていく人。“山のもん”で自警団のリーダーではありますが、つかみどころがない感じがして、秀明って本当はどう考えているのかよくわからない。周りが変わっていく中で、なぜそんな頑なに自分の思いを信じ続けられるのか……。その辺りが今後理解できていくとさらに面白くなるんじゃないかなと。松井さんにもまだ特に何も言われていなくて、他の人たちにはいろいろと面白い演出が付いているんですよ。……あれ、僕の発信を待ってるんですかね(笑)。でも最近、成り行きに任せるといつか、あまり自分で解釈して自分で考えた演じ方を仕掛けていくんじゃなくて、素直にやったほうがいいんじゃないかなって思ったりして。今回、そのバランスを考えながら稽古をしていきたいと思ってます。

祭といって思い浮かぶのは、幼稚園の時の学芸会。オペレッタをやったんですけど、その時の曲やみんなでワーワーやってる感じは、いまだに覚えていますね。みんなで集まって「やるぞー!」みたいな感じが、祭っぱいになって。幼い頃はよく引越していたので、あまり地元のお祭に馴染みがないんです。

中学校からは鎌倉だったんですけど、でも海、あんまり好きじゃないですね。山は、前田(司郎)くんたちと何回か登っていて、冬の山は静かで好きです。2000mの山小屋にある露天風呂を目指して、雪をかき分けて登ったりしました。だから山派かもしれないですね。海はね、危ないんですよ。急に深くなったり、流れが速くなったりしますし。

あ、でも1人で行くなら海ですね。やっぱり育ったところなんで、落ち着く感じがします……。結局どちらも好きですね(笑)。



1977年生まれ、神奈川県出身。蜷川幸雄率いる「ニナガワ・カンパニー・ダッシュ」(現 ニナガワ・スタジオ)から、劇団ハイバイを経て、現在は劇団には所属せずに活動中。近年の主な出演作に、舞台 木ノ下歌舞伎「糸井版 摂州合邦辻」(糸井幸之介演出)、KAAT神奈川芸術劇場プロデュース「ルーツ」(杉原邦生演出)、『宮本武蔵(完全版)』(前田司郎演出)、城山羊の会「水仙の花 narcissus」(山内ケンジ演出)、こまつ座「十一びきのネコ」(長塚圭史演出)、サンプル「ファーム」(松井周演出)など。映像では「刑事7人」(テレビ朝日)、『透明なゆりかご』『美女と男子」(NHK)、映画「鈴木家の嘘」(野尻克己監督)など。

三村和敬 Kazunori Mimura （高城宗男）

僕が出演したドラマを松井さんが観てくださり、オファーしてくださったそうで、(ガッツポーズで)「やったあ!」と。その時は松井さんがどんな方か、どんな作品なのかはよくわからなかったんですけど、普段こういった舞台に出演することがあまりないですし、絶対にいい経験になると思って、即答で出演を決めさせていただきました。

そのあと台本を読めたら本当に面白くて、小説を読んでいるかのような感じで、どんどん読み進めていきました。「こんな台本があるんだ」と思いましたし、それを自分がやらせてもらえることをありがたく感じます。と同時に実感が湧いてきて、すごく緊張が走りましたね。宗男はこれまで演じたことがないタイプの役ですし、最初は「できるのか」という緊張もあった気がします。でも稽古が始まった今は、普通の若者が、本当にいろんな偶然によって人とは違ってってしまう様が見せられれば、と。死から蘇ったとか、神様になるってことをコテコテに演じるのではなく、そういう様子が宗男から滲み出てくるのが面白いと思うし、それが表現できれば、今回の舞台で僕なりの役割を果たせるのではないかと想着いて。なので今まで通りに取り組みつつ、ほかの方のように稽古でいろいろ試していこうと、稽古を楽しんでいます。

そうそう、実は先日、サンプルのワークショップに5コマ参加して、今どっぷりサンプルに浸かっています。サンプルゲノム、入ってますね(笑)。講師も参加者も、ハイセンスすぎて、「こんな人たちがいるんだ!」と、ちょっと劣等感みたいなものを感じているくらいです。『変半身』に参加させてもらって、視野が広がったというか、目覚めました!

海か山かでいうと、僕自身はどちらもそんなに好きではないのですが、虫がいないという点で“海派”です。プライベートでも海や山に行くことはほとんどないし、気分転換するには散歩で十分。稽古帰りに歩いたりすることはよくあって、自然というより街を見て歩くのが好きです。ただ今年の夏は珍しく海に行きました。行けば行っただ、ちゃんと楽しむんですけど(笑)。祭というと、ほぼ毎年行っていた地元の祭を一番連想します。僕が通っていた中学校の校庭でやっていた区の祭で、そんなに規模は大きくないけれど、ちょっとした花火も上がるような、楽しいものという記憶があります。

自分と似てるなって思う人、僕は割と多いんです。中でも同じ事務所の金子大地くんは、同い年で、すこぶる合いますね。「あの作品見た?」とか「今日ちょっとお金貸して!」って言う絶妙にタイミングが同じなんです(笑)。

1996年5月27日生まれ、神奈川県出身。NHK大河ドラマ「天地人」「おんな城主 直虎」、舞台「大逆走」(赤堀雅秋演出)や『そして僕は途方に暮れる』(三浦大輔演出)に出演。2010年映画「告白」、2014年映画「渴き。」や2016年映画「ちはやふる 上の句/下の句」などの話題作にも多数出演し、2017年6月に公開された映画「橋上ブルー」では主演を務める。その他の出演作は、2017年映画「デメキン」、2018年映画「となりの怪物くん」、2019年舞台「空ばかり見ていた」(岩松了演出)、NHK-BSプレミアムドラマ「ワンダーウォール」などがある。



大鶴美仁音 Minion Otsuru （尾形祐美）

私が今、所属している唐組とは全然カラーが違う現場なので、ぜひ挑戦したいなと思いましたし、プロデューサーの三好さんが私の演技を観たうえで「出てほしい」と情熱的に誘ってくださったので、そこまで言っただけならぜひ、と。

これまで松井さんの作品は1回だけ、新潟の森の中にある廃校で

上演された『ヘンゼルとグレーテル』*を観たことがあって、

その公演があまりにもパワフルだったので、今回が楽しみでありつつ、怯えてもいました(笑)。

実際に台本を読んでみたら、途中からどんどん世界観が広がっていき、

松井さんワールドがすごくて……いい意味で“ト変態”だなと(笑)。

今まで体験したことのない世界観だと思いました。

その中で、私が演じる尾形祐美は、島の普通の女の子から、死後の世界に触れた男の子と出会い、
どんどん感化されていく役。最初は人間らしい小さい葛藤を持っているんだけど、
最後は世界を巻き込んだ葛藤になっていき、一番変化が大きくとても魅力的な役なので、
どうやって料理しようかと思っています。

松井さんとは役についてまだそんなに多くを話せてはいないのですが、

これから稽古でアドバイスをもらいながら徐々に輪郭ができていけば。

でもいろんな可能性がある役だなと思っています。

あと自分は海が大好きなので、祐美が“海のもん”なのがうれしいです(笑)。

海は見るのも好きですが、入って泳ぐのが一番好き。

小さい時から小笠原諸島やハワイ島に連れて行ってもらって、よく海で泳ぎました。

偶然ウミガメに会ったこともあるんですよ!今でも芝居で疲れたら必ず海に行って泳ぎますね。

泳いでいる間はきっぱり割り切って、芝居のことは考えず、真っ白な状態にしています。

透き通った海で泳いでると、浄化されるんですよ。

祭といえば、私は高円寺に住んでいるのでやっぱり阿波踊りですね。

でもそれ以上に祭の“原風景”として思い出すのは、小学校の時のキャンプファイヤーでしょうか。

みんなでインディアンの格好をしてはしゃいで、あの時が一番自分を解放できた感じがします。

それと、小学校の時に観たケチャは、神と自然に通じている感じがして、

とても祭っぽさを感じました。

トッベルゲンガー的に“似ている”と感じる人は、親だから当たり前かもしれませんが、父です。

「なんでこんな行動をしちゃうんだろう」と思ってよく考えると、

父も同じことをしてるなって気付いたり(笑)、

あと例えば誰にも受け入れてもらえなかったようなことを

父は受け入れてくれて、やっぱり感覚が似てるなと思います。

他人でも、「前世で会っていたのかな」と思うような相手が同性でも異性でもいますね。

そのうちの1人は、年の離れた中国人の友達で、全然バックボーンが違うんですけど、いろんなことが通じ合えた。

「国境超えてこんなことがあるんだな」とうれしかったですね。

※2015年テスト・サンプル04『ヘンゼルとグレーテル ～もう森へなんかいかない～』

1991年生まれ。東京都出身。日本大学藝術学部卒。
唐組「ジャガーの腰」2008で俳優デビュー。
以降「少女仮面」、オフィス3〇〇「赤い壁の家」、
トム・プロジェクトプロデュース「挽歌」、串田和美演出「K.テンベスト2017」、
「白い病気」、唐組「吸血姫」、
シアターコクーン・オンレパートリー「唐版・風の又三郎」公演など。
2019年夏頃から劇団唐組に入団し、美術も手がける。

日高啓介 Keisuke Hidaka （尾形圭一）

もともと松井さんの作品が大好きで、杉原邦生さんが演出した『ルーツ』と、
昨年は『自慢の息子』にも出演させていただきました。どちらも素晴らしい体験だったんですけど、
やっぱり新作で一緒にいたいと思っていたところ、今回お声がけいただき即決、という感じですね。

松井さんの描く登場人物は、1人ひとりに愛があるんです。

僕が所属しているFUKAI PRODUCE羽衣は“愛”をテーマにしていますが、

松井作品の“分裂した”登場人物たちも、

愛ゆえの分裂、という感じがすごくする。ひどく文句を言ったり、人に突っかかりたりするの、

実は人を深く愛しているから執着するんじゃないかと思うんです。

僕なんかは正直、もっとドライなので、そこがちょっと羨ましいですね。

最初に台本を読んだ時の印象は……かなり変態(笑)。「ルーツ」や『自慢の息子』で描かれた社会は、
日本のどこかにありそうって感じがするけれど、今回は本当に架空の場所で、根本的に世界が違うというか、
別の惑星の話という感じがしています。なので、千久世島のルールや秩序について、
台本を読むだけではわからない部分があると、稽古場でみんな、松井さんを質問攻めをしています(笑)。

僕が演じる尾形圭一は、金子くん演じる、“山のもん”の代表的存在である高城秀明の義父で、
“海のもん”の取りまとめ役。秀明といがみ合いつつも、“海のもん”と“山のもん”のパイプ的な役も担っています。
パツと見では自分の利権、私利私欲に走るようなわかりやすい地元のおっちゃんのような感じもしましたが、
実はそういうところはどうでもよくて、二分した勢力を自分が統一し、
とりまとめることに悦を感じているというか、あまり目的がない人という感じがするんですよ。
これまで経験したことがないような役ですし、読めば読むほど難しいなと思っています。

僕は断然、海派です。宮崎出身なので、原付免許がもらえた時は友達にバイクを借りて海辺を走った、
なんて思い出もありますし、周りにはサーフィンをする友達も多いんですけど、
2016年に宮崎でサーフィンをテーマにした『板子乗降臨』(脚本:土田英生、演出:永山智行)に出演した時、
作品のためにと土田さんたちとサーフィンを体験したら、まあ大変で(笑)。
なので、海は入るのではなく、見るのが好きです。今でもKAAT神奈川芸術劇場に行く時は、
必ずちょっと早めに行って、缶コーヒーを飲みながら山下公園をブラブラしたりしますね。

宮崎は神話の国なので、神社がすごく多いんです。

夜通し踊る“神楽”や、僕が子供の頃は見世物小屋に来ましたし、

神社の裏ではコソコソしてるお兄ちゃん、お姉ちゃんがいたり(笑)、猥

雑な感じがあった。祭と言うと、そんな神聖さと猥雑さが一緒になったものが、

生活の近くにあるような記憶ですね。

1972年生まれ。宮崎県出身。
2004年にFUKAIPRODUCE羽衣の旗揚げに参加。
その後、劇団化に伴いメンバーとなる。
劇団外での活動も多く、舞台、映像作品などに出演。
羽衣では年に一度オリジナル楽曲でライブを行う。
2012年、「CoRich舞台芸術まつり!」にて俳優賞受賞。
近年の主な出演舞台に木ノ下歌舞伎「心中天の網島」、サンプル「自慢の息子」、
FUKAIPRODUCE羽衣「ピロートーキングブルース」など。



能島瑞穂 Mizuho Nojima (比留間ルイ)

今回、まずキャスティングしてくださったことが本当にうれしくて。

松井さんの作品自体は『ルーツ』に参加していますが、演出を受けるのは初めて。

今まで青年団の友達が松井さんの演出作品に出ているのをたくさん観てきたので、今回は私も松井さんの世界の住人になっていいんだと本当にうれしかったです。

『変半身』の台本を読んだ印象は、ちょっとぶっ飛んでるなって(笑)。

最初はじわじわと、立場の違う人達が自分のポジション争いをしながら、隙を突いて自分の勢力を広げていく、というような話かなと思ったんですが、途中でボンと世界が飛んで、真っ白な世界に行くというか。

世界がどんどん変わっていくので、私も自分の先入観をなるべくなくして、

「ここからどうなるんだろう？あれあれあれ……」と、流れに押されるような感じで読み進めていきました。

日本なんだけど、ちょっと違う世界観が提示されているし、独特な世界なので、自分の役のセリフだけで追うのではなく、ほかの人のセリフもしっかり拾っていかないと、世界観がつかめなないと思いましたね。

私が演じる比留間ルイは、今私が生きている現状、私が生きている世界よりも、もうちょっと“生き抜く”ことにヒリヒリとしたものを感じながら生きているんだろうなと。

彼女に比べると私は、もう少しぬるっとした日本の現状に守られて、

ぼんやりした感じで生きているんじゃないかと思います。

そんな比留間ルイの状況を、どのようにイメージしていけるのかが課題だなと思っています。

私個人は、登山に行くので“山派”ですね。行く時は二泊三日で行ったりします。と言っても、本当は行きたくないんです(笑)。

登ったらその分、必ず降りないといけないし、山を歩いていても演劇のことばかり考えちゃって、山にまで行っても煩惱で頭がいっぱいになっちゃうなんて自分でもバカだなんて思うんですけど(笑)。

それでも山に登らないと見られない景色もあるので……年に1回くらいは大きな登山に行きたいと思っています。

でもここ数年、海の波が見たいという強い気持ちが湧いていて、

何十年も海に行ってなかったんですけど、

鎌倉の海辺を延々と、3駅分歩いたりしていますね。

出身は東京の初台なので、祭と言えば初台通りの商店街のお祭のイメージ。

祭囃子が聞こえてくると、初台の駅前に夕方、

提灯がばーっと吊られている光景が浮かんできます。

あとは小学校の時に阿波踊りに参加していて、それがけっこう本格的で(笑)、

夏の夕方、学校の体育館に通ってずっと練習していたんです。

だから祭のリズムは今も身体に残っています。

相性がいい人って不思議といいますよね。その人とはいつまでも話していただけるし、

だんだん自分と話しているような気持ちになってくるというか、

相手と自分との境界がよく分からなくなってくるような……

その人と話していると、そんな不思議な感覚になることがあります。

1998年、劇団青年団に入団。以後、「東京ノート」、「走りながら眠れ」、「日本文学盛衰史」、「ニッポン・サポート・センター」(全て平田オリザ作・演出)等、多数の作品に参加。外部の出演作に、五反田団「おやすみなさい」、ハイバイ「て」「ヒッキー・ソトニデミターノ」、「月光のつゝしみ」、KAAT神奈川芸術劇場プロデュース「ルーツ」、キラリふじみ・レパトリー「僕の東京日記」、FUKAIPRODUCE羽衣のライブ公演など。



王宏元 Wang Hong Yuan (田部草太)

10月下旬に王宏元、台湾のプロデューサー・新田幸生が対談。

聞き手を日高啓介が務める。

—— 王さんは今回初めて、日本でのクリエイションに参加されます。

王 今回、この作品に関わることになったのは、新田さんに「日本人の俳優や演出家と一緒に舞台を作ることに興味ありますか？」と聞かれたから。「興味ある」と即答しました。というのも、僕は若い時から日本の文化や本に興味があって、個人的にも何度も旅行に来ているんです。2018年に来日した際、松井さんとお会いしたのですが、すごく緊張して、めちゃくちゃしゃべったんですよね(笑)。そのことを実はずっと後悔してたんですけど、松井さんはそういう感じの僕でも大丈夫と思ってくれたようで、正式にオファーをいただきました。

—— 新田さんは今回、台湾との共同製作の面でプロジェクトに関わっています。なぜ王さんがいいと思ったんですか？

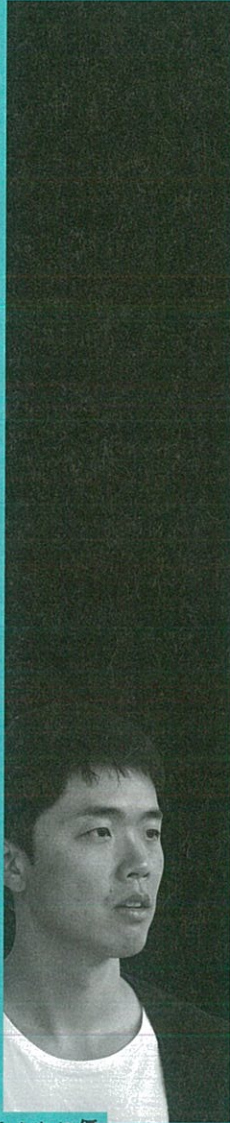
新田 私がプロデュースする作品は国際共同製作が特に多いのですが、共同製作という場では新しい刺激を得て、さらにいいものを作ることが大事なので、キャリアが長かったり、演技がうまかったりする俳優が必ずしもいいわけではないんですよね。その点で、王さんはキャラクターとキャラクターの間の柔らかさが素晴らしいし、すごくポジティブな性格で、彼がいる稽古場はすごく明るい感じになるんです。だから王さんがバツと思い浮かびました。

—— 新田さんは、松井さんの台湾取材をコーディネートされました。その取材はどうでしたか？

新田 かつて政治犯が多数収容されていた緑島へ行ったんですけど、松井さんは収容所跡を見学した時に、中国語はわからないのに、その雰囲気や歴史にちょっと泣いていたようでした。その時に私が確信したのは、台湾の歴史や文化が松井さんのクリエイションを変えるだろう、ということ。現地コーディネートはアーティストの反応が何よりも大事で、そういう意味で今回の旅は意味があった、と思いました。

—— なぜ緑島にしたのですか？

新田 プロデューサーの三好さんから、今回の作品では島やマイノリティーが題材だと聞いていて、「歴史や政治など、いろいろ複雑なバックグラウンドがある島を」というリクエストがありました。今、日本の皆さんは、台湾にリベラルなイメージがあると思います。なぜ今、台湾がそういう状態なのかというと、実は世界で一番長く、暗い検閲の時期(白色テロ)があったからなんです。そのことは台湾人以外にはほとんど知られていませんが、もし今回、松井さんの作品を通して日本の皆さんに「台湾がなぜ今、そんなに優しくてリベラルなのか」という理由がわかればいいなと思ったんです。



—— “暗い時代”は何年くらい続いたのですか？

新田 1940、50年代から1990年までですね。例えばあるマンガ家が自分の意見や政府の悪口を翻訳したとして、それだけで周りの人たちも“政治犯”として一緒に逮捕され、緑島に送られました。誰かの通報で捕まることもあって、例えば私が「日高さんは実は匪諜(スパイ)だ」と通報すれば、次の日に日高さんは消えてしまう。怖いのは、通報者が逮捕者の全財産をもらえることで、だから当時捕まった人にはお金持ちが多かったんですね、医者や企業の社長、政治家など。

—— 実際に稽古が始まって、いかがですか？

王 個人的には、とてもセンシティブになっていると思います。来年の初めには台湾の大統領選挙がありますし、香港のこともありますし、『変半身』にも独立の話や、もともと住んでいる人と外部の人の対立など

が描かれますが、私の中でそういうことが今、生々しく響いています。と同時に最近よく考えているのは、「台湾の文化とは何か」ということです。台湾の文化は、中国の南の福建など中国とつながっているものが多い。でも本当に台湾のオリジナルな文化といえば、先住民族の文化なのかなと思います。台湾の先住民族は単一ではなく、約16程度あるはずです。『変半身』の台本から、台湾の文化と関係性をいろいろ感じます。例えば“海のもの”と“山のもの”って2つのグループが出てきますけど、実は台湾の先住民も、山の上に住んでいる部族と、海の近くに住んでいる部族とがいて、どっちの部族も外来の政府から圧迫されていた歴史がありました。それと台湾は、第一次世界大戦以前は、日本・スペイン・オランダの植民地になっていて、複雑なバックグラウンドを持っていて、「わたしはだれ」というテーマを持っているなど。私自身、台湾にいたときの自分を外来者だと感じていました。先住民が一番、台湾にいる歴史が長いわけなので。

—— 最後に作品にちなんでの質問ですが、“海のもの”“山のもの”でいうと、王さんはどちら派ですか？

王 小さいころは山の中で育ったので山で遊ぶことも多いんですけど、実は海も好きなので……あえて言うなら島派かなと(笑)。

—— ご自分の“変半身”、ドッベルゲンガー的な存在に会ったことはありますか？

王 俳優としては、舞台上で急に相手とテレパシーが通じることが何回もありましたが、人間としてはないですね。誰でもそういう存在を探しているんじゃないかと思います。

1983年生まれ。台湾大学演劇学科を卒業。舞台俳優、台本作家、演出など幅広く活動する。舞台経歴15年、リアルな演技を好みながら、どんな役でもやりつつ、ミュージカルでも活躍。最近はその姉妹們的劇団、非常林奕華、台南人劇団、創作社劇団、末路小花、仁信合作社、無獨有偶工作室、瘋戲樂工作室、果陀劇場など、数々の劇団に携わる。2011年監督担当作品、台湾建国100年記念ビデオ〈寶島歌舞向前走〉では、同年誠品本屋で建国100年十大話題にノミネートされた。

安 蘭 け い Kei Aran （ 丸 和 玲 香 ）

松井さんとは昨年の7月に『レインマン』で一緒に、その時にかつて東京宝塚劇場でアルバイトしていた話などを伺ったので、親近感を持っていました。『レインマン』は稽古場がとても楽しくて、作品としてもすごく良いものが出来上がったんです。

だからまた機会があれば松井さんとお仕事をさせていただきたいと思っていたら、そのあとすぐにお声がけいただいて。

その時点では、まだ作品の内容がはっきり決まっていなかったんですけど、「ぜひともやらせてください」と迷いなくお返事しました。

松井さんは、全然怒らないんですよ。でも役者に「こうしてください」と、根気強くちゃんと言い続ける演出家。

例えば役者ができなくて諦めそうになっても、果敢に挑戦し続けるんです。

松井さんの演出を受けて、演劇への取り組み方が今までとちょっと変わったと感じますし、

とても演出力がある方だなと思いました。

松井さんの作品は、昨年新潟で上演された『自慢の息子』と、今年の夏に『ピピを見た!』を拝見しました。

松井さんが表現するものって、すごくかわいらしかったり、キレイだったりするんだけど、

実際には中身がドロドロしているというか、人のエグいところを描こうとしている感じがある。

私もそういう世界観が好きですし、『変半身』も、もっとエグい役かな?と覚悟していたくらいです。

今回の稽古場でも、松井さん自身が本当に芝居が好きなこと、

この作品が好きなことが感じられて、やっけていてとっても楽しいし、

松井さんのために面白くしたい、と思います。

私が演じる丸和玲香は、東京から千久世島にやって来た、ゲノムパッチという製薬会社研究所の社員。

たぶんきっちりしている人なんじゃないかなと。でもイルカに執着……というか恋をしていて、

その恋は私たちが思う恋なのか、もうちょっと別の何かなのかはまだよくわからないんですけど、

すごく純粋な、乙女な気持ちを持っている女性なのかなと思います。

作品についてもまだまだわからないことはたくさんありますが、

聞けば松井さんはフレンドリーにお話してくださるし、ちゃんとした世界観を提示してくださるので、

松井さんに聞けば間違いないと思っています。

私自身は、役と一緒にとにかく水が好きです。泳ぐのが大好きなので、

小学校の頃から水泳大会に出たりしていましたし、実家が滋賀県で、海はないけど琵琶湖があったので、

子供の頃は琵琶湖や川でよく泳いでいましたね。最近は登山が好きで、

富士山や高尾山にも登ったりしています。でも山登りがいいと思ったのは年齢を重ねてからですね。

海のほうは身も心も開放される気がするので好きです。

地元にもいろいろお祭はありましたが、宝塚では年に1回、

いろんな組のスターが集まるTCAスペシャルという祭典があって、

それが祭のイメージですね(笑)。お客様に観ていただくものののに、

自分たちも「祭だ〜!」と言って楽しんでいました。

祭というと、そのイメージかな。

1991年、宝塚歌劇団に首席で入団。2006年、星組男役トップスターに就任。
2009年、宝塚歌劇団を退団。退団後も女優として舞台を中心に活動。
「サンセット大通り」「アリス・イン・ワンダーランド」(共に鈴木裕美演出)の演技に対して、第38回菊田一夫演劇賞受賞。
近年の主な舞台作品に「スカーレット・ピンパーネル」(ガブリエル・バリー演出)、
「白蠟の巢」(谷賢一演出)、「リトル・ヴォイス」(日澤雄介演出)、
「リトル・ナイト・ミュージック」(マリア・フリードマン演出)、「レインマン」(松井周演出)、
「民衆の敵」(ジョナサン・マンビィ演出)、「マン イスト マン」(串田和美演出)、
「ハル」(栗山民也演出)、「HAMLET-ハムレット-」(森新太郎演出)など。

